
桜咲く刀

葵夢幻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜咲く刀

【Zコード】

N6791C

【作者名】

葵夢幻

【あらすじ】

とある刀屋、そこで頼忠はその刀と出会った。

「オヤジ、これは何だ？」

ほつたよりただ

通りすがりに入った刀屋で某、本多頼忠は珍しい、いや珍しいと言つより、本当に刀かと疑いたくなる物を目にした。

普通刀という物は必ずといって良いほど反りがある。反つている刃は人を斬り易いからだ。

だが目の前にある刀は確かに刃が反つてゐるのだが、何故かその反りが二つある。刃先が少しだけ反つた後、その後ろの刃が大きく反つてゐる。まるで波を打つてゐるような刀だ。

頼忠がよほど物珍しく見ていたのか、店の主人は機嫌良く、自慢したいかのように頼忠へとよつてきた。

「これはこれはお武家様、いらっしゃいます。申し訳にいくのですが、生憎とこちらは売り物ではございません」

「では何故店に置いてあるのだ？」

「箱を付ける為ですよ」

誇らしげな顔をする店主に對して頼忠は思わずあきれた顔をする。要するにこの店には値打ち物があると宣伝したいのか。まあ、確かにこのような変わつた刀が置いてあれば誰もが目を引くだろう。

「これはそこまでの名刀なのか？」

店に箱が付くほどだ、よほどの物なのだろう。

頼忠も武芸をたしなむ者としてかなり興味を引かれた。

「そうですね。名刀というより……妖刀でございましょうか」

「妖刀？」

「はい。武蔵守清定、またの名を『桜花』と呼ばれております」

「妖刀桜花ね……」

確かに変わつた刀であるが妖刀とまで言わると少し信じがたい。

頼忠は真つ直ぐな性格をしているのか思つたことが素直に顔に出でおり、それを見た主人はむつとした後、勝手に桜花の事を話し始

める。

よつぽど桜花が自慢らしい。

この桜花という刀はですね。先程妖刀ともうしましたが、別に不思議なことが起こつたり特別な力が在る訳ではないのですよ。えつ、じゃあ、何で妖刀なのかって？

お武家様、話を焦つてはいけませんよ。そいつをこれからお話するんじやありませんか、まあまずは話を聞いてくださいよ。この桜花はですね、そんじょそこらの刀よりかは遙かに名刀と言つても良いほど切れ味が良いのですよ。だから腕さえあれば一撃で相手を切り裂くですよ。

けど、その切れ味がうえに妖刀と呼ばれるよつになつてしゃいやした。

どうしてって？ 旦那、血の雨を降らせるつて言葉だばけてる居を見たこと無いですかい？

ありますよね。この桜花はその芝居どおりに血の雨を降らせることができるんですよ。しかも切り下げるんじやなく、切り上げると血飛沫がまるで桜のように飛び散り、その切られた人の姿はまるで桜以上に美しいそうです。

つまり人の体が桜の幹で、血飛沫が花びらということですかね。しかもその人の桜はどんな桜よりも美しいときたものだから、それを見たくてこの刀を手にしたお侍様はつい人を斬つちまう。

まあそんなわけで桜花は妖刀とされてウチの店では売らないのですよ。

一通り説明して満足したのか店主は満足げに頷く、そして何故か

頼忠も満足げな顔をしていた。

「それで幾らなのだ？」

「はい？」

「幾らでその桜花を売ると聞いておるのだ？」

突然の頼忠の申し出に店主は「いや、あの、そう申されても……」

とかなり困惑する。

そんな店主に向かつて頼忠は更に問い合わせる。

頼忠も免許皆伝とは行かぬが一刀流の目録までは持つていて、つまり武芸にはかなり自身がある。そのうえ桜花の話を聞いて興味を持つなどいうことが無理な話だ。

それに桜花はそんじょそこらの名刀より切れ味が良いそうではないか、たとえどんな妖刀と言われようとも名刀には違いない。だからなんとしても欲しい。

「はあ……」

店主は諦めたかのように溜息を付く。そして自信満々に、いや、本人としてはかなり意地悪な顔をしたつもりなのだろう、指を一本だけ頼忠の前に突き出した。

「千両、そこまで申されるのなら千両で売りましょう」「買つた

「買つた」

「はい！」

まさかそんな法外な金額で頼忠が即答すると思つていなかつた店主は驚くどころか思考が止まってしまい、そのまま硬直する。

固まつている店主を見て頼忠は売買が成立したと思ったのか、それともこのまま成立させたかったのか「今は手持ちが無いので後で使いをよこす。その者が千両を持つてこの店に来るから、その者に桜花を渡してくれ」それだけ言い残して、そつそと店を出てしまつた。

後に残つたのはいまだに固まつてゐる店の者達だけである。

そして数日後、桜花は見事な桜を咲かせた。

(後書き)

以前書いた物を掘り出してみました。まあ、少し躊躇もしましたが、思い切って載せてみました。

出来たら感想をくれればありがたいです。

以上、葵夢幻でした。そしてここまで読んでくださりありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6791c/>

桜咲く刀

2010年10月21日21時14分発行